

E. サピア『言語』(1921)の言語史原理(前篇) : 「第9章 言語はどのように相互影響しあうか」解説

著者	三輪 伸春
雑誌名	地域政策科学研究
巻	10
ページ	171-194
別言語のタイトル	On Sapir's Principles of Historical Linguistics (I) : An Interpretation on Sapir's View of Language Contact
URL	http://hdl.handle.net/10232/16669

E. サピア『言語』(1921)の言語史原理(前篇)
—「第9章 言語はどのように相互影響しあうか」解説—

三輪 伸春

On Sapir's Principles of Historical Linguistics (I)
— An Interpretation on Sapir's View of Language Contact —

Nobuharu MIWA

Abstract

This paper is an attempt to examine the Sapir's view on the language contact, particularly referring to the chapter 9 of E. Sapir's *Language: An Introduction to the Study of Speech* (1921).

Sapir expounds his view on the history of language in chapter 7, 8 and 9. He explains historical characteristics of one particular language, i.e. English, in chapter 7, and those of two relative languages, i.e. English and German, and finally the universal features noticeable in all human languages in chapter 8.

In chapter 9, the final chapter with regard to the historical study of language, Sapir gives his view on the problems of the language contact (=borrowing). Borrowing from foreign languages has been regarded as one of the so-called three methods in the nineteenth century historical-comparative linguistics: i.e., sound change, analogy and borrowing. Sapir, however, insists that borrowing has nothing but secondary significance in comparison with the other two methods, because foreign elements are borrowed only if such elements are adjusted to the target language, while the other two methods, i.e. sound change and analogy are always and unrestrictedly active and ready to work.

キーワード：1. サピア, 2. 言語史, 3. 駆流, 4. 言語接触, 5. 借用

Key Words : 1. Sapir, 2. history of language, 3. drift, 4. language contact, 5. borrowing

日本語要旨

日本の英語学界では、サピアは共時的な記述言語学者としてよりも drift (駆流) という用語とその概念に象徴されるように歴史的研究の論述中で言及されることが多いようである。しかし、サピアの言語史論とサピアの提唱した drift (駆流) という用語とその概念は正しく読み解かれていないようである。サピアの *Language* (『言語』) という本は大部な本でもなく、とりわけ難しい専門用語を駆使しているわけではないが、サピアの言語史観を理解していないと読解は難しい。

サピアは、言語の歴史を、第7章、第8章、第9章の三章を通じて一貫した言語史観で、非常に綿密に考え抜かれた緻密な構成で、音韻、形態、借用、類推、そして音声のパタンと形態のパタン、drift (駆流) といった用語、概念を、緊密に重層させ、繰り返し織り込んで巧みに言語の歴史の本質を論じている。第7章と第8章を、例えば、drift だけに焦点を絞って読めばそれなりに理解できるであろう。また、第9章を、「言語接触」だけに焦点を絞って読めば、古今東西の諸言語間に見

られる相互影響をそれなりに把握できるであろう。しかし、これらの三つの章は、言語の歴史をいろいろな側面から観察するための方法が緊密に繰り返し織り込まれていて、サピアの一貫した言語史観の総体を漏らすことなく把握することは容易ではない。そのためか、言語の歴史的考察を述べた第7章、第8章、第9章という三つの章でサピアが意図したことは正確に理解されていない。

本稿の目的は、サピアが言語の歴史に関して論じている、第7章、第8章、第9章の三つの章を読み解くことにより、サピアの言語史観の真相を探り、サピアの歴史的研究の原理を明らかにすることである。

目次

はじめに

第1章 サピアの言語史原理の要約

第2章 英語史とサピアの言語接触論

§ 1. 英語史における借用論

§ 2. 英語史の借用論からサピアの言語接触論へ

第3章 サピアの第9章「言語はどのように接触しあうか」の展開

§ 1. 借用は副次的原理である

§ 2. 言語間の影響は一方向的である

§ 3. 単語の借用（寛容な場合と抵抗する場合）

§ 4-1. 音声パタンへの借用はまずありえない

§ 4-2. 音声の借用は、もしあっても付随的である

§ 5. 形態パタンへの借用もまずありえない（以上前篇＝本稿）

第4章 サピアの言語史の原理 第7章、第8章解説

§ 1-1. 英語の駆流：駆流 A

§ 1-2. 英語とドイツ語の駆流：駆流 B

§ 2. 音声のパタンと形態のパタンの並立：駆流 C

§ 3. 類推を駆流 C に

§ 4. ウムラウトからアブラウトへ：駆流 C

§ 5. 駆流 C: 音声のパタン、形態のパタン、類推

第5章 サピアの言語史論の検証

§ 1. 英語における外来語の特徴

§ 2. 結論

はじめに

サピアは、言語の歴史を、第7章、第8章、第9章の三章全体を通じて一貫した言語史観で、非常に綿密に考え抜かれた緻密な構成で、音韻、形態、借用、類推、そして言語の音声と形態のパタン、drift（駆流）といった用語、概念を、緊密に重層させ、繰り返し織り込んで巧みに言語の歴史の本質を論じている。

第7章と第8章を、例えば、drift だけに焦点を絞って読めばそれなりに理解できるであろう。また、第9章を、「言語接触」だけに焦点を絞って読めば、古今東西の諸言語間に見られる相

互影響をそれなりに把握できるであろう。しかし、これらの三つの章は、言語の歴史をいろいろな側面から観察するための方法が緊密に繰り返し織り込まれていて、サピアの言語史観の全体像を漏らすことなく把握することは容易ではないように思われる。言い換えれば、サピア以前の歴史言語学が印欧比較言語学だけを歴史言語学と認識し、証拠として尊重されていた文字言語を持たない印欧諸語以外の、北米、アフリカ、南米などの言語には歴史を認めていなかったことへの痛烈な批判になっている。文字言語を持たず、話し言葉(speech)しか持たなくても印欧語よりも古い歴史を持つ言語があること、また、現に話し言葉しか持たなくても印欧語よりも古い歴史を持つ言語があることを考慮に入れた言語学を確立することを主張している。それが‘Introduction to the Study of Speech (話し言葉研究入門)’の意味であり、歴史言語学研究の範囲と方法の根本的な見直しを要請する内容である。しかし、サピアは『言語』のなかではそういう主旨の表現はまったくしていない。サピアの『言語』が出版された1921年にヘルマン・パウエルは死去している。ということは『言語』の原稿執筆中にはまだパウエルは存命中であったために、若年であり、ゲルマン比較言語学で言語学の緒についたものの北米先住民の研究者であったサピアは大胆な発言を控えたのかもしれない。

そのためか、言語の歴史的考察を述べた第7章、第8章、第9章という三つの章でサピアが意図したことは正確に理解されていないようである。本稿はサピアの第9章の言語接触論・借用論を読み解くことにより、サピアの言語史観の全貌を探り、サピアの歴史的研究の原理を明らかにすることである。

本稿は以下の方針で書かれている。

- 1) 引用文のページ番号は岩波文庫版(安藤貞雄訳)によった。
- 2) サピアを論じるにあたり、いわゆる論文形式にではなく、サピア自身の書いた文章を証拠にサピアの考えたことをあとづけ、サピアの言語に関する思想の解釈に徹する方針を堅持した。従って、引用はほとんどすべてサピアからの引用だけであり、サピアの意図が理解できることを最優先の目的とし、日本語からだけでも理解できることを目的としたので英語の原文はひとまず省略した。サピアの原文がどうしても必要と思うほどの人であれば自ら原本に当たって確認していただきたい。一個所だけ英語を引用したところがある(引用37)のはこれがサピアの借用論のキーセンテンスであり、本稿から読み取ってほしいサピアの意図であるからである。同じ理由で研究文献からの引用も極力さけた。参照した文献は拙著『英語史への試み』(1988)を参照。
- 3) サピアの英語は重要な概念を重層的に織り込んだ個所が多く、木坂千秋訳とそれをもとにした泉井久之助訳、それに安藤貞雄訳は参照したが逐語的に日本語に置き換えてもサピアの意図は汲み取りにくいところが多い。本稿を書き始めた時にはなるべく先行訳を尊重したが後半は筆者のサピア解釈にもとづく日本語になっている。ただし、読みやすさを考えて先行訳との違いについてのことわりはいちいち入れていない。【...】は訳文理解のために著者が補った部分。先行訳を取り違えての誤訳、誤解があればすべて筆者の責任である。著者の意図するところは、名著と言われ、古典として尊重されるサピアの『言語』であるがサピアの思想がサピアからの直接の引用に基づく具体的な解釈や解説が少ないよう

に思われるのでサピア自身からの引用に基づく解釈，解説を試みたことである。サピアの直訳ではなく，意識ともいえない。「訳述」（『英語学ライブラリー』にいくつかの例がある）といえるだろうか。

- 4) drift の訳語は，安藤訳では「偏流」，泉井訳では「駆流」である。筆者は drift と語源の同じ動詞 drive 「(言語をある一定方向に) 駆り立てる」を考慮して「駆流」が適切と考え，一貫して用いてきた。ある学会で安藤先生ご本人に「先生の岩波文庫版では「偏流」となっていますが私は駆流の方がいいように思いますが」とたずねたところ「岩波文庫本では偏流ではなく駆流にした」とのことであったが実際には「偏流」になっている。『現代英文法辞典』（1991，三省堂）の‘drift (偏流)’の項の原稿は三輪執筆であり，「駆流」と訳しておいた。編者の一人である安井稔先生はサピア協会の場で「drift の項には自分は関わっていない」とのことであった。
- 5) 本稿全体でサピア『言語』の第7章，第8章，第9章を解釈するが，第9章を最初に行っているのには理由がある。

筆者は1986年に，英語における外来語の方法論的論考であり，同じゲルマン語でありながら外来語の少ないドイツ語に比べてなぜ英語には外来語が多いのかを考察した「英語における外来語について ドイツ語と比較して」（『英語史への試み』1988年に再録）以来，『英語の語彙史』1995，南雲堂，『シェイクスピアの文法と語彙』2005，松柏社，『英語の辞書史と語彙史』2011，松柏社）で英語史における外来語の借用に関する諸問題を論じてきた。

借用語は英語の語彙の75%を占め，ラテン語，フランス語をはじめ世界中のほとんどすべての言語からの借用語を持つ。従って，外来語の影響は，語彙に限らず，発音，文法，意味の変化にも及ぶと考えられてきた。筆者も外国語が英語の発音，文法，語彙面に大きな影響を与えてきたという前提で英語における外来語研究をすすめてきた。ところが，『英語の辞書史と語彙史』（2011，松柏社）で外来語の借用と深くかかわる辞書の変遷と語彙史を扱い，最終講義（2011）で「イギリスの地名」を外来語との関連で論じた際に，過去20編を超える外来語に関する論文に一貫する方法論はなにかという素朴な疑問を抱いた。そしてサピアの第9章を再読することになった。しかし，第9章は，第7章，第8章を前提としているので，第9章を論じたのちに，第7章，第8章に立ちかえることになった。それが本稿の目次にある第4章である。しかし，サピアの言語史の原理を順序立てて考察するにはいずれ第7章，第8章そして第9章へという順序に書き換える必要があると考えている。

6) サピアの原典と訳書

E. Sapir, *Language, An Introduction to the Study of Speech*, Harcourt, New York, 1921, rpt. 1949; British ed. 1921, 1949, 1963, 1970.

『サピア 言語 ことばの研究序説』1943，木坂千秋訳，刀江書院。

『言語 ことばの研究』1957；1967³（訂正版），泉井久之助訳，紀伊国屋書店。

『言語 ことばの研究序説』1998，安藤貞雄訳，岩波書店。

研究書としては拙著『英語史への試み』1988，こびあん書房。

第1章 サビアの言語史原理の要約

『言語』の歴史的考察に関する三つの章の標題は、

- (3) 第7章「歴史的所産としての言語 駆流 (Language as a Historical Product; Drift)」,
- 第8章「歴史的所産としての言語 音法則 (Language as a Historical Product; Phonetic Law)」,
- 第9章「言語はどのようにして相互に影響しあうか (How Languages Influence Each Other)」

である。

サビアの言語史観を理解するための最良の手段はサビア自身の書いた『言語』そのものを丹念に読むことであろう。従って、本稿はほかならぬサビア自身に語らせるために『言語』からの引用に基づくという手段をとることになる。

言語の歴史を論じたサビアの第7章、第8章、第9章は、

- (4) 第1に、「駆流」については第7章にのみ解説してある。
- 第2に、第7章と8章は「言語の歴史」について書かれている。
- 第3に、第9章は「言語の相互影響」について書かれている。
- 第4に、以上の三つの章はそれぞれ独立している。

と理解されているようである。しかし、そのような理解の仕方は不十分である。

第7章では、文法的に正しい“Whom did you see?”より“Who did you see?”の方が好まれるのはなぜかという、英語史入門ともとられそうな具体的な例文を検証して英語の歴史的特徴がまとめられている。

第7章と同じ章題の第8章の前半では、祖語を同じくする英語とドイツ語に共通する母音の連鎖的大推移(いわゆる「大母音推移」)を題材として発音の歴史を論じている。後半では、音声変化により混乱を生じた形態の体系が類推の建設的な作用により文法組織の修復を進める過程が論じられ、形態のパタンの根強さと類推の再調整能力が述べられている。その結果、音声の変化、その影響を受けた形態の変化、そして類推による修復、音声の変化、が言語変化の普遍的な円環運動として描かれている。(p.324)

次いで、言語の歴史との関連で「借用・言語接触」に関して述べられているのが第9章である。世界中の言語の中で「これまでに圧倒的な重要性を持ってきた言語は5つだけある。古典中国語、サンスクリット語、アラビア語、ギリシャ語、ラテン語である」(p.337)という文章で始まりいくつかの例を挙げたのちに「ある言語が外来語に直面した際にどのような反応を示すのか それに反発するのか、翻訳するのか、それとも自由に受け入れるのか についての研究は、その言語に内在する形態上の傾向に、非常に貴重な光明を投ずる場合がある」(p.341)という橋渡しの文章を境に、章末(p.357)までのほとんど毎ページに借用が言語のパタンに

与える影響はほとんどないという主張が繰り返しなされている。例えば、「非常に重要な点は、それぞれの言語には、その音声パタンには手を付けずにおこうとする強い傾向があることである。(…) 語彙においても、また音声面においても、言語間の影響を過大視しないように注意しなければならない。」(pp.348f.)をはじめとして【英語は】ラテン語やギリシャ語に由来する接辞をいくつか利用している。【しかし】英語の構造上の特異点は何ひとつ付け加えていない」(p.348)など。英語における外国語からの影響を正面から否定している次の三つの引用は特に重要である。

- (5) 1. 【英語はフランス語、ラテン語、ギリシア語から接辞をいくつか借用しているが】英語の構造上の特異点には何ひとつ付け加えていない。英語が【I will, We shall, といった分析的な代用形ではなくて】フランス語の総合的な未来形【*aimerai-je* (単純未来) *aurai-je raimé* (前未来)】をモデルにして、あるいはラテン語の重複法 (*tango, tetigi* (私が触れる 私が触れた), ギリシャ語の *leipo, leloipa* (私が残す 私が残した) といった重複法を機能的な手段として借用したのであれば、当然、真の形態上の影響があったといってもよい。【しかし、】そのような広範な論証はできない。(pp.349-50. 要約)
2. 英語史全体を見わたしてみても、形態上の【すなわち、重要な形態のパタンに関わる】変化で英語本来語の駆流によって決定されなかったものは、ほとんど一件も指摘しえない。(p.350)
3. 【言語の】奥底に隠されている構造上の根本的な特徴を説明するには、「借用」説は、全く不十分である。(p.355)

音韻法則・パタンが第一義的であり本質的原理である一方、借用では根本的な特徴を説明できない、つまり借用は副次的、表層的であるという見解は比較言語学の方法としての借用の位置づけの見直しを要請する重要な見解である。

第9章の結論は第7章と第8章の結論と同じである。つまり、言語にとって第一義的なのは、音声のパタンと形態のパタン、類推それに「駆流」である。そしてあくまでもパタンを第一原理として、パタンに適合した要素だけが外国語から借用されうることを論じた第9章「言語接触論」とは表裏一体をなしている。

印欧比較言語学にとって最も重要な方法論は音韻規則であり音韻対応である。このことは「音韻規則に例外なし」という考え方に表現されている。

印欧比較言語学にとって最も重要な原理は、

- (6) 1. 「音韻規則」であり、
もし音韻規則に例外があればそれは無条件に
2. 「借用」、すなわち外来語の影響、あるいは
3. 「類推」、

として説明されてきた。

サピアも音韻規則・パタンを第一原理と考えるが、借用を無条件に音韻法則の例外とするのではなく、借用は受け入れる側の言語のパタンに適合する要素のみが受け入れられる、ということを実証している。従って、借用は音韻法則と同じ次元での無条件の例外ではなく音韻規則に比べれば二次的原理であるという見解は印欧比較言語学の方法論の見直しを要請する重要な見解である。

類推についてはどうか。サピアは「音変化は【形態組織の整合性を顧慮することなしに】機械的に働く」(p.326)のために破壊されて混乱を生じた形態組織をもとの形態のパタンに適合する方向への修復・再調整する作用は類推の建設的な作用であるという見解であり、類推が従前の比較言語学よりも格段に重要視されている。(p.329)このことも印欧比較言語学の方法論の見直しを要請する重要な見解である。

『言語』という書物は約2カ月というごく短期間に書かれた比較的小さい本である。が、特に第7章、第8章、第9章は、音声のパタン、形態のパタン、駆流、類推、借用といったキーワードを巧みに操って言語の歴史的研究の考え方が非常に緊密な構成で書かれていて決して読みやすい本ではない。しかも、世界の多くの多様な言語を共時的、通時的に研究したサピアにして初めて見渡せることができた言語史観は、筆の進むままに自由奔放に書き続けられたような印象を受ける。しかし、実際は、事前に周到に考え尽くされた構想のもとに、一字一句もゆるがせにすることなく緊密に構成されている。従って、従来の比較言語学の先行研究になじんだ読者にとっては理解しやすいように書かれてはいない。

第2章 英語史とサピアの借用論

§1 英語史における借用論

筆者の語彙に関する最初の考察は「英語の語彙について ドイツ語と比較して」(1986, 『英語史への試み』1988に再録)であり、次いで「英語の借用語」, 「ラテン語の借用語」, 「スカンディナヴィア語の借用語」の3編を総論風の論考として執筆した(1991, 三省堂『現代英文法辞典』の執筆項目)。これらの論考に加えて、英語の語彙変化、意味変化研究の具体的な成果としてでき上がったのが『英語の語彙史』(1995, 南雲堂), 『シェイクスピアの文法と語彙』(2006, 松柏社), 『英語の辞書史と語彙史』(2012, 松柏社)に収録した諸論文である。

以上の諸論文を書き続けるなかで参考にした主な語彙史・意味変化・語源の先行研究は、例えば以下のようなものであった(OEDなど辞書は除く)。

(7) Serjeantson, M. S. *A History of Foreign Words in English*, 1935.

Sheard, J.A. *The Words We Use*, 1954, 1970⁴.

Strang, B. *A History of English*, 1970.

Scheler, M. *Der englische Wortchartz*, 1977

Hughes, G. *A History of English Words*, 2000

英語の語彙の全体の約75%を借用語が占めるので英語の語彙論は外来語の語源に関する研究が多くなる傾向がある。また、英語の語彙史、意味変化、語源の先行研究は、筆者の知る限り、英語史の通史的な研究も、特殊研究も、文献に基づいて借用された個々の単語の意味変化、語源を個々別々に調査することが主な作業になっている。文献・歴史資料を主な証拠として、直近の借用元言語から可能な限り順次歴史をさかのぼり、個々の単語の借用元言語の語形を分析し、意味の変化を記述するというものである。上記の4冊の問題点として、

(8) 第1に、方法論らしきものがない。

第2に、参照している史料・原典がイギリスの文学、歴史資料に限られる傾向がある。従って、視野が広いとはいえない。

これらの研究は、従来の比較言語学の手順に習い、外国語から借用された語について論を進めている。が、どのような語や要素が受け入れられるのか、もしくはどのような語や要素が受け入れられないのかという問いかけはしていない。その意味で借用の原理に関する考察がない。

一方、英語の語彙史に関する研究の中で方法論を前面に掲げているわけではないが、原理的視点を提示しているのが以下の3点である。

- (9) 1. ブラッドリ (H. Bradley), *The Making of English* (1904, 1968²), 寺澤芳雄訳, 岩波書店 (1988)
2. イエスペルセン (O. Jespersen), *Growth and Structure of the English Language* (1938, 1967³)
3. スミス (L. P. Smith), *The English Language* (1912)

これらの研究では、「なぜしかじかの語、要素が借用されたのか、英語に借用された後どのような役割を果たしたのか」という問い方がなされている。

ブラッドリの序文がそのことを象徴している。

- (10) 本書の目的は、英語の発達の中で比較的著しい変化を惹き起こした原因についておおよその知識を与え、また英語が思想表現の適切な手段となる上に、これらの変化がどのような役割を果たしてきたかを評価する。(ブラッドリ『英語発達小史』寺澤芳雄訳、p.29、下線、引用者)

ここには英語の歴史に変化をもたらした原因とその変化がもたらした結果について考えるという著者の意図が表明されている。単に、英語史にみられる変化の過程を記述するだけでなく、なぜ変化がもたらされたのか、そしてその変化が英語にどのような結果をもたらしたのかという問い方がなされている。

また、スミスは、新しい思想がどれほどその時代に導入された新しい語彙に反映されているか、逆にある時代の語彙がどれほど正確にその時代に特有の思想傾向を反映しているかを実証

して思想と語彙が表裏一体、不即不離の関係にあることを証明している(L. P. Smith, *The English Language*, chap.8)。

ところが、英語史の語彙史研究の基本的文献であるブラッドリ、イエスペルセンとスミスの論旨は見かけ以上に視野が広く含蓄に富み、十分に理解されていないようである。これら3冊の本をていねいに読み直しながら、この三人の研究を正確に読み解くように努力して考察した結果が語彙に関する上記の筆者の諸論文である。

§ 2 英語史の借用論からサピアの言語接触論へ

英語の借用語に関して方法論を求めてゆくうちに、第9章で英語と外来語、英語の言語接触、言語接触論、言語史論一般へと論を進めているサピア(E. Sapir, *Language, An Introduction to the Study of Speech*, 1921)に出会った。

第9章で、英語の言語接触から印欧諸語の言語接触論、そして言語史論一般へと論を展開し、結局、言語間の相互影響もすべての言語が祖語から受けついだパタンを堅持し、パタンを第一原理とし、パタンに適合する要素のみが受け入れられる、というサピアの言語接触・借用に関する結論は従前の比較言語学の方法論としての「借用」の本質を明らかにし、見直しを要請する見解である。

第9章の後半は、借用を論じながら、形態のパタンの作用の重要性が説かれているので、第8章と第9章それぞれの後半は、形態のパタンも音声のパタンに負けず劣らず強い力を持っていることが主張されていることになる。その点、第9章の結論は、第7章、第8章で論じた、共時的な視点のパタンと通時的な視点の「駆流」に適合する現象のみが借用として受け入れられるという結論と一致している。

サピアは『言語』の第9章「言語はどのようにして相互に影響しあうか」の中で次のように述べている。

- (11) ある言語が外来語に直面した際にどのような反応を示すのか それに反発するのか、翻訳するのか、それとも自由に受け入れるのか についての研究は、その言語に内在する形態上の傾向に、非常に貴重な光明を投ずる場合がある。(p.341) (下線、三輪。下線部は重要な意味を持つことに注意)

ある言語が、借用された外来語の音韻、形態に直面した際にどのような反応を示すかを調べることによってその言語に内在する形態上の傾向を明らかにできる場合がある、というサピアの主張は、実は単に借用された個々の外来語彙の問題ではなく、言語の根幹にかかわる問題を示唆していることに十分な注意が必要である。借用された外来の単語から受け入れる側の言語に内在する形態上の傾向、すなわち、形態のパタンの駆流をうかがい知ることができる、というのである。サピアからの引用(11)を、例えば、『言語』を日本で最初に翻訳した木坂千秋は次のように解釈している。

- (12) 借用語は言語体系にとってはその部分をなしているが、やはり異分子である。これ

が体系内においていかなる様相を呈するかを綿密に検討すれば、分子としてのその特異性が明らかになると共に、体系にとって在来の純正なる要素はまたいかなる特性を有するかをも自ずから明確にしうる。(…) 真の言語研究において借用語に価値を見出すには、かかる観点によらなければならない。従って、真の意味の「借用語論」はかくのごとく体系内における借用語の特異性を明らかにするものでなければならない。

(木坂千秋『英語と外来語の相互影響』, 1941, p. iv)

木坂の記述を敷衍して書き換えれば次のようになるであろう。

英語という言葉は非常に多くの外来語を借用してきた。そこで英語が外来語にどのように接し、反応してきたかを個々の外来語（借用語）についてひとつひとつ調べてゆくことによって、英語の音声体系、語彙体系における借用語の特異性の一端を明らかにすることができる。

例えば、[kæbərɛi, boukɛi (bukɛi), nɛi] は長母音 [e:] をもつフランス語からの借用語 cabaret, bouquet, née の英語化された発音である。結果として、フランス語から英語へのこの変化から英語には [e:] という長母音はなくそれに最も近い音は二重母音の [ei] であること、また、英語は二重母音を好む傾向にあることもわかる。異なった言語間では、それぞれの音韻体系が違う以上同じ発音のように見えても、まったく同じ発音はありえない。従って、ある言語が外来語を借用する際には、自分の言語の音声のうちでもっとも近い音を充当して借用する。そこで、例えば、英語がフランス語の単語を借用した場合、発音をどのように変えて採用されたのかを調べれば、英語の音声体系の特徴をうかがい知ることができる。

木坂の理解は上の範囲であろうと解釈できる。

ところが続いてサピアはきわめて重要な見解を書き加えている。

- (13) 以上の四つのすべての場合 【中期英語におけるフランス語からのふたつの音】語頭の j, 語頭の v, 【最近英語に取り入れられた camouflage のふたつの音】語末の “zh”, や father の a のアクセントのない音【camouflage の第三音節の a】 英語は新しい音を輸入したのではなく、古い音の用法を拡大したにすぎない。 (p.342) (下線, 三輪。)

つまり、中期英語期にフランス語から借用された後しばらくして英語化した語頭の j, 語頭の v というふたつの音と、現代期に借用された camouflage のふたつの発音は純粹にフランス語からの新規の借用ではなく、実は、英語が古い時代に持っていた音を復活したにすぎない。言い換えれば、英語が潜在的に受け継いできた音声のパタンにもともとあったがたまたま何らかの音声変化による事情のために欠落していた音を復活したのであってまったく新規の外来音を採用したわけではない。

外国語の影響、言語接触という問題に関するサピアの見解は単に個々の語彙のレベルでの音形態、語形態にとどまる問題ではなく、受け入れる側の言語の内的パタンに適合した要素のみが受け入れられるという条件が必要であるという意味で比較言語学の研究方法に根本的な見直しを要請する見解である。すなわち、借用された単語がどのような音声、形態上の手直しを受けて取り入れられるのかを調べれば受け入れる側の言語の音声と形態の内的構造（パタン）が

わかるということの意味する。

フランス語から借用された後しばらくして英語化した音変化は、純粋にフランス語からの借用ではなく、実は、英語が以前に持っていた音を復活したにすぎない。一方、英語の音声構造(sound pattern)に適合しない音は排除されるか、英語の音声の中で最も近い音に変えて採用される。言語接触においては、受容する側の言語のパタンが最優先され、外来の音声はパタンに適合する場合のみ採用される、あるいはパタンに適合するように手直しを受けて借用される。各言語が祖語から受け継いだパタンはそれほど強固である。(p.324)

サビアの言語接触論が単に個々の単語の音と語形の借用のレベルにとどまるものではなく、「音声構造の型(sound pattern)と形態構造の型(formal pattern)」が第一原理でありそれに「類推」作用が形態のパタンの動向に不可欠の機能としてあげられ、他方、借用は第二義的、表層的であるとされる。

第3章 サビア第9章「言語接触論」の展開

§ 1. 「借用」は副次的原理である

言語接触に関するサビアの見解を『言語』の第9章「言語はどのようにして相互に影響しあうか」からの引用に基づきながら検討する。

サビアは、言語の根幹にかかわる借用を一切否定しているわけではないが、従前の印欧比較言語学に比べるとかなり否定的である。サビアの言語の歴史に関する射程の範囲が印欧比較言語学の想定よりもはるかに広く長いからである。

(14)【最低の文献、碑文などの証拠があれば】まずまずの确实さをもって、しかじかの諸言語は共通の源から発している、ということ是可以だが、他の【印欧諸語以外の、歴史文献を持たない言語については】しかじかの諸言語は系譜関係がない、ということではできない。【なぜならそれらの言語がどれほど長い歴史を持っているのかわからないからである。】共通の起源から出ていることが絶対に間違いないと推論できるほど、同族関係を示す証拠は集まっていない(...)【逆にいえば、たかだか5千年の歴史しかない文字の証拠だけで絶対に共通の起源ではないと推論できるほど、同族関係を示す証拠は集まっていない】。(p.353)

(15) 語族については、何ひとつ決定的なものはない。語族を立てるときにいえるのは、要するにここまでは行けるが、それ以上はだめだ、ということにすぎない。研究が進むにつれて、いつなごとき、思いがけない光明が投じられて、その「語族」はより大きな言語群のひとつの「方言」にすぎないことが明らかにされることがあるかもしれない。(…)言語起源が一元か、多元かについていえば、人間の制度としての(あるいは人間の「技能」としての)言語は、人類の歴史においてただ一度発達しただけ(...)ということはおおいにありそうなことである。(pp.263-5)

人類の言語の原初の状況についてサビアの見解は、印欧比較言語学が碑文、共通の語彙などによりもっとも古い言語の証拠を5千年以前程度（高津春繁『印欧語比較文法』, p.56）と推定しているのとは大きな差がある。文字による文献の証拠と碑文に基づくたかだか5千年さかのぼるだけの証拠では言語の類縁関係はわからない、ということである。従って、一見すると隣接する言語からの借用にみえる現象も、実は、祖語を同じくする言語が祖語から受け継いで共通に潜在的に持っているパターンに由来する現象である場合があることに注意を喚起している。この見解は、サビアがゲルマニストとして歴史だけが唯一無二の方法であった印欧比較言語学で言語学の緒につき、修士論文完成以降にボアズとの出会いから文字を持たない北米先住民の言語に触れ、その後は、アフリカの諸言語、中国語、セム語、サンスクリット語にも、あるいは人類学、心理学にも専門家と肩を並べるほどの域に達する深く広い見識を得ていたからこそ到達し得た結論である。歴史中心の印欧比較言語学と非歴史的な北米、南米、アフリカ、アジアの諸言語に沈潜することから得られた歴史を超えた結論である。いわば、共時言語学と通時言語学を止揚（アウフヘーベン）した発想であり、超時言語学（metachrony）と称することができる。その点が、例えば、ブルームフィールドとは根本的に違う。ブルームフィールドの *Language* (1933) は、前半は共時的・記述的なアメリカ構造主義言語学の確立及び発展に大いに貢献した内容であり、後半は現在でも一読に値する歴史言語学の優れた概説であるが、前半の共時言語学と後半の歴史言語学との間には一貫した原理がない。

サビアはいう。

- (16) 言語は計り知れないほど太古からの人類の遺産である(...)。人間の文化的遺産のうちで、火を得るために錐をもむ技術にせよ、石を削る技術にせよ、言語以外にもっと古くからあった、と主張できるものがあるかどうか、疑わしい。わたしとしては、話しことばは、もっとも低段階の技術の発達よりもなお先に生じており、しかも重要な表現の道具である言語が、それ自体はっきりした形をとるまでは、【言語以外の、火を得るために錐をもむ技術にせよ、石を削る技術といった】これらの文化の発達は、実は厳密には不可能であった、と信じたい気持である。(p.44)

現今の古代人類史の研究成果（例えば、『日本人のはるかな旅』2001, NHK）によると、人類の祖先がもっとも古い石器を使用したのは230万年から140万年前のホモ・ハビリスである。また、現生人類（ホモ・サピエンス）が15万年から10万年前頃にアフリカで誕生し、アフリカから、ヨーロッパ、アジア大陸方面に出発したのは約6万年前と言われている。現生人類がアフリカを出発してから現在の分布状況に至った以上の道筋はだいたいわかってきている。ある集団は、アジアの南海岸沿いにアラビア半島、インド、インドネシア、オーストラリア方面という南のルートをとった。別の集団が、アジア大陸中央部をシルクロード沿いに中国、モンゴル、シベリアを経由してアジア大陸を横断してベーリング海峡を渡ったのは1万5千年前のことである。その後、まだ氷河に覆われていた北米本土を避け西海岸沿いに南米の最南端に到着したのは約1万2千年前である。

つまり、アフリカからヨーロッパ、アジア、そして北アメリカ、南アメリカに分布する人類

の言語すべてが、アフリカを故郷(ハイマツト)として拡散していったひとつの言語に由来する。それに見合うような言語の類縁関係をサビアは約一世紀前に見通していた。

従って、安易に借用と決めつけないように注意を促し、一見隣接する言語からの借用と思われる現象も実は受容する側の言語が祖語から受け継いできたパターンに由来する現象であることを証明するために外堀から順次埋めるがごとくに、螺旋階段を一步一步上るがごとき手順を踏んで、従前の、安易に借用と決めつけようとする態度に強く反省を促し、最終的には次の引用文にみられる結論に導いている。

(17) だとすれば、狭い地域内の異なる言語間に類似した例が多くみられる場合は、(...) 共通したパターンや音的実質の最後の痕跡に他ならない、ということにはならないだろうか。

近代英語とアイルランド語とのあいだには (...) 両者の【同じ印欧語族に属するという】系譜関係をかなり決定的に立証するに足りるほどの語彙と形態法の類似点があるが、今もなお存在するように思われる。【このような】形態上の類似の比較的重要な分布の多くは、まさに【印欧祖語から連綿として受け継がれてきた】痕跡として説明すべきである。(...) 言語複合体の奥底に隠されている構造上の根本的な特徴を説明するには「借用」説はだけではまったく不十分である。(pp.353-5)

この引用は第9章の末尾近くにあり、借用に関するサビアの結論である。そして、サビアは第9章の冒頭からこの結論に至るまでに古今東西の諸言語から精選された的確な証拠をあげて、従来言語接触による借用とみなされてきた言語現象の多くが実は、それぞれの言語が祖語から受け継いできたパターンに基づいた結果であることを繰り返し述べている。

そして、なによりもサビアの主張は、サビアが周到に用意した実例を一つ一つ検証しなければ理解できない。サビアの論旨は無駄がなく全体と部分部分が実に緊密に呼応しあうように構成されていて一部を取捨選択して論じることができないようになっている。「捨てられる」部分がないのである。そこで本稿は、第9章の内容を重複をいとわずに順を追って引用し読み解く。

§ 2. 言語間の影響は一方向的である

世界中で完全に孤立した言語はまずないであろう、特に原始民族の場合はそうである (p. 333)。言語間の接触の結果は一方に強く傾くことが多い。中国語は何世紀にもわたって朝鮮語、日本語、アンナン語の語彙に洪水のようにはいっていったが逆方向への影響はまったくない。ラテン語は中世、近代の西ヨーロッパの諸言語にきわめて大きな影響を及ぼした。また、特に英語は、多くの語彙をノルマン・フレンチから、次いで中央フランス語から受け入れた。その結果、英語が西ヨーロッパ諸言語のうちでも抜きんできて分析的なフランス語から全体的な分析的傾向への進行を幾分促進されたほどの影響を受けたことは否定できない。また音声パターンに多少の影響を受けた。しかし、英語の方からは取り上げるほどの影響はフランス語になにも与えていない。(pp.333-4)

ある言語が他の言語に与えるもっとも単純な影響は、単語の借用である。単語の借用は文化の違い、文化思想の流入、文化の程度の差から生じる場合が多い。例えば、日本語の書き言葉に与えた漢語。タイ語、ビルマ語、カンボジア語に仏教とともに流入したサンスクリット語やパーリ語。古典ローマ、ギリシャからの思想、文化とともに西洋の諸言語に流入した多数の語彙 (p.336)。

結果として、文化伝播の上で圧倒的に重要性を持ってきた言語は五つである。古典中国語、サンスクリット語、アラビア語、ギリシャ語、そしてラテン語である。一方、英語の語彙が他の言語の中核に浸透した例はまったくない。(pp.335-7)

§ 3. 語の借用；寛容な場合と抵抗する場合

ところで、ある言語が外国語に対して寛容的であるか反動的であるかはそれぞれの言語の性質による。

(18) 借用する側の言語自体が言語資料に対して示す心理的な態度が、その言語の外来語に対する受容性と深く関係しているということは、大いにありそうに思われる。英語は長いこと、単音節であれ多音節であれ、完全に統一された、分析できない語を得ようと努めてきた。(…) intangible のような語は、ひとたび【英語に】順化されると、どんな語幹的な単音節語 (たとえば, vague, thin, grasp) にも劣らないくらいに、単一の心理的実体となる。

ところが、ドイツ語では、多音節語は、有意味な要素に分析されようと努める。それゆえ、文芸復興期による文化的影響の絶頂期に借用された膨大な数のフランス語やラテン語は、ドイツ語の中では生き延びることができなかった。(…) それゆえ、ドイツ語では、新しい語の必要が生じると、ドイツ語にもともとある資料から造る方が容易である、と一般に考えられてきたのである。(pp.338-9)

従って、英語に比べてラテン語やフランス語からの借用語がドイツ語に少ない理由は、

(19) ドイツがイングランドに比べて、古典時代のローマやフランスの文化圏と密接な関係を持たなかったためにすぎない、という想定は全面的に正しいとはいえない。逆に英語にフランス語からの借用語が多いのは、ノルマン人の侵入という事件を過大評価してはならない。(pp.337-8)

同じような現象が、サンスクリット語に対するカンボジア語とチベット語の反応の違いに見出すことができる、としてサピアは次のように結論している。

(20) ある言語が外来語に直面した際にどのような反応を示すのか つまり拒絶するのか、翻訳するのか、それとも自由に受け入れるのか についての研究は、受け入れる側の言語に内在する形態上の傾向に、非常に貴重な光明を投ずる場合がある。(p.341)

この引用の意味するところを次節で考えてみる。

§ 4-1. 音声パターンへの借用はまずありえない

言語が違えば音韻体系が違う。従って、音声としては同じように見えても聴く人の受け取り方は言語によって違う。隣接する言語間の音声面での影響についてサビアは次のように述べる。

(21) 外国語の単語の借用は、つねに、発音の手直しを伴う。

自国語の発音習慣に合わない、異国風の音やアクセント面の特異点が必ずある。そこで、そういうものは、自国語の発音習慣にできるだけ違反しないように変えられる。発音上の歩み寄りが起こることも、ままある。最近、英語に導入された camouflage (カモフラージュ) のような語は、今日の普通の発音では、英語やフランス語の典型的な発音習慣のいずれにも対応していない。【語頭の】帯気音の k, 第二音節のあいまい母音, l 音と最後の a 音の明確な音質, 中でも, 第一音節におかれる強いアクセントは, すべて英語の発音習慣に無意識のうちに同化してしまっただけの結果である。これらの諸点が, 英語の camouflage を, フランス人が発音する同じ音とははっきりと区別している。これに対して, 第3音節の長く重い母音と, “zh” 音 (azure (空色) の z のような音) が語末に生じている点は, 明らかに非英語的である。それは, ちょうど, 中期英語において, 語頭の j や v が, いまだこそその外国語風の印象は薄れてしまっているが, はじめは英語の習慣に完全には一致していない, と感じられたに違いないのと同じである。(pp. 341-2)

ところが上の引用 (21) に続いてサビアはきわめて重要な見解を記している。

(22) 以上の四つのすべての場合 【すなわち, 中期英語におけるフランス語からのふたつの音,】語頭の j, 語頭の v, 【そして最近英語に取り入れられた camouflage のふたつの音, すなわち】語末の “zh”, や father の a のアクセントのない音 (camouflage の第三音節のこと)【のすべての場合】 英語は新しい音を輸入したのではなく, 古い音の用法を拡大したにすぎない。

(...) このような事実は, 言語がその音声パターンへの根本的な干渉に, どれほど頑強に抵抗するものであるかを示している。(pp.342-3)

つまり, フランス語から借用された後しばらくして英語化したこれら4つの音変化は, 純粹にフランス語からの借用ではなく, 実は, 英語が古い時代には持っていた音を復活したにすぎない。言い換えれば, 英語が潜在的に受け継いできたパターンにもともとあったがたまたま何らかの音変化のために欠落していた音を復活したのであって全く新規の外来音を採用したわけではない。従って, 英語に受け入れられた。重要なことは, 言語が祖語から受け継いできたパターンは頑強に変化や干渉に抵抗するという事実である。

外国語の影響, 言語接触という問題に関するサビアの見解は単に個々の語彙のレベルでの音

形態、語形態にとどまる問題ではなく、受け入れる側の言語のパターンに適合した要素のみが受け入れられるという条件が必要であるという意味で比較言語学の研究方法に根本的な見直しを要請する見解である。すなわち、借用された単語がどのような音声、形態上の変化を受けたのかを調べれば受け入れる側の言語の内的構造（パターン）がわかるということの意味する。

フランス語から英語への借用ついてまとめる。

チョーサーの英語でフランス語の音を保っている母音は、二重母音 [ɔi] と鼻母音 [ã] (chaunce, change) である。[ɔi] は、英語の母音体系の「偶然のあきま (accidental gap)」であったので英語の音素として確立した。ゲルマン系の言語にはなじみのない鼻母音 [ã] は、結局、英語の音素としては採用されないで、代償延長 (compensatory lengthening) を経たのち、いわゆる大母音推移に従って上昇し、二重母音化した (鼻母音 [ã] > 長母音 [a:] > [e:] > 二重母音 [ei])。

フランス語の [e:] を二重母音化 (née > [nei]) したことから、[ɔi] を抵抗なく借用したことから英語は二重母音を好む傾向にあることが分かる。他方、英語の鼻母音に対する拒否反応から英語には他のゲルマン語と同様に鼻母音を受け入れる素地がないことが分かる。[dʒ], [z], [v] という三つの子音は古英語期には音素としては存在せず、異音としてのみあらわれていた。[dʒ], [z] はチョーサー以前の英語では語頭にはこないが、フランス語からの借用語により語頭にも生じるようになった (judge, gentil; zeal, zealous)。語頭の [v] も古期英語にはなく、フランス語からの借用語により獲得した (veil, very, vain, vale, vote)。語頭の [dʒ], [z], [v] は古英語以来異音としてのみ存在したが、フランス語からの借用語により音素として確立した。フランス語からの母音、子音の例からもわかるように、一般的に、外来語の音が英語にもたらされたときに英語がどのように反応するかを調べることにより、英語の母音体系・子音体系の性質が明らかになる。

単純に、フランス語からしかじかの音が借用されたということではなく、フランス語の発音のうち英語の音声パターン適合する音だけが借用された、もしくは英語の音に近い音が適合するように手直しを受けて借用されたということであり、フランス語の発音そのままの無条件借用はないということが重要である。従って、例えば、鼻母音のように英語の音声パターンに適合せず、借用されなかった音もあるということも重要である。英語を始めゲルマン諸語がフランス語の鼻母音を受け入れなかったという事実は、英語とフランス語の音声構造の特徴あるいは相違点を検討する際に重要な指標となる。

§ 4-2 音声の借用は、もしあっても付随的である

言語が違えば音韻体系が違う、従って、外国語の音声そのままの借用はないし、受け入れる側の言語の音声パターンに組み入れられることもない。

- (23) 外国語の単語の借用は、つねに、それらの語の音声的手直しを伴う。まず、自国語の発音習慣に合わない、異国風の音やアクセント面の特異点がある。そこで、そういうものは、自国語の発音習慣にできるだけ違反しないように変えられる。(p.341)

(24) にもかかわらず、われわれは、諸言語が現に音声面で相互に影響しあうこと、それも、借用語とともに外国音を引き継ぐ場合とは全然関係のない事例を知っている。(…) 地理的に限られた地域内の、まるで【系譜】関係がない、あるいは非常に遠い【系譜】関係しかない諸言語間に、いちじるしい音声上の平行性が生じる点である。(p.343)

そしてあげられた例は次の4例である(1, 2, 3, 4の番号は引用者による)。

- (25) 1. ゲルマン諸語には、一般に、鼻母音を発達させていない。しかし、一部の高地ドイツ語の方言(…)には、古い「母音+鼻子音(n)」のかわりに、いまでは鼻母音がある。これらの方言が、鼻母音をふんだんに使用するフランス語の近くで話されていることは、単なる偶然にすぎないだろうか。
2. オランダ語やフラマン語を、例えばドイツ語北部やスカンジナビアの諸方言から対比的に区別する、一般的な音声上の特色がいくつかある。こういう特質のひとつに、帯気しない無声閉鎖音(p, t, k)の存在がある。これらの音は、帯気するフランス語の音を思い出させるような、明確な金属的な音質を持っていて、英語、北部ドイツ語、デンマーク語の、もっと強い、帯気閉鎖音と対立する。もしかりに帯気しない閉鎖音の方が古い音であり、古いゲルマン語の子音の変化されないままの結果音だと仮定すると、フランス語に隣接するオランダ語の諸方言が、ゲルマン語に一般的であったと思われる音声的駆流を守って、これらの子音を【フラン語風に】変化させなかったのは、【単純に借用と決めつけられないという意味で】重要な歴史的事実ではないだろうか。
3. 以上の例よりもいっそう印象的なのは、ロシア語やその他のスラブ諸語が、音声上のある特殊な面で、ヴォルガ河流域の、類縁関係のないウラル・アルタイ諸語に奇妙にも類似している点である。例えば、ロシア語で、“yeri”(イェルィ)と呼ばれている、特異な鈍い母音は、ウラル・アルタイ諸語には類似音はあるが、インド・ヨーロッパ語族の中ではスラブ語に最も近いゲルマン語、ギリシア語、アルメニア語、インド・イラン語にはまったく欠落しているのだ。
4. 音声上の平行性で最も人を困惑させる例のひとつは、ロッキー山脈の西側で話される多数のアメリカ・インディアン諸語によって提供される。(…) アラスカ南部からカリフォルニア中央に至る地域には、まるで類縁関係のない語系が少なくとも四つある。にもかかわらず、この広大な地域のすべての(…)言語は、ある重要な音声上の特徴を共有している。そのうち主要なものは、調音法が非常に特徴的で、まったく珍しい聴覚的效果のある、「声門化された」系列の閉鎖子音の存在である。この地域の北部では、類縁関係の有無にかかわらず、すべての言語はさらに、種々の無声のl音と、普通のk音系列とは語源的に異なる「軟口蓋」(後部口蓋)閉鎖子音の系列とがある。(pp.344-6)

限られた地域内における、類縁関係のない諸言語間に見られるこれら四つのいちじるしい音

声上の平行性についてサピアは以下のように結論する。

(26) 以上述べたような四つの特異な音声上の特徴が、隣接した言語群の間で独立して発展しえたとは、到底信じがたい。(…) 実は、現在のわれわれには証明しえないような系譜関係に起因する古い類似性である可能性がある。しかし、(…) たとえば先に挙げたヨーロッパ語の3例のうちのふたつではこの説明は排除しなければならない。(p.346)

引用 (25) を解説すると以下ようになる。

引用 (25) の1～4のうち、「先に挙げたヨーロッパ語の3例のうちのふたつ」とは、引用 (25) の1と3であり、隣接する言語からの借用であることは間違いない。借用と考えられる二つの音についてサピアはいう。

(27) 【一部の高地ドイツ語の方言 (…) には、古い「母音 + 鼻子音 (n)」がいまではフランス語と同じ鼻母音になっている。この】鼻母音も【ヴォルガ河流域の、類縁関係のないウラル・アルタイ諸語に奇妙にも類似している、ロシア語で“yeri” (イェルィ) と呼ばれている特異な鈍い】「イェルィ」も、ともにインド・ヨーロッパ語において二次的な発生であることが実証できるからである。(p.346)

つまり、高地ドイツ語の方言の鼻母音もロシア語の「イェルィ」も明らかに借用である。音韻体系の核心部分に組み込まれておらず、付随的に追加されているにすぎない借用音である。

(28) 言語音や、ある独特の調音法は、文化の諸要素が地理的中心点から放射状に広がっていくのとはほぼ同じ要領で、連続する地域に伝播しようとする傾向がある、と推論しないわけにはいかない。(p.346)

この現象は「波状説 (Wave Theory)」や日本の柳田国男の「言語圏論」の一種といえよう。

引用 (25) の4の「ロッキー山脈の西側で話される多数のアメリカ・インディアン諸語」に共通に見出される「声門化された系列の閉鎖子音の存在」はどうか。

北米インディアンの諸言語は1万5千年前にアジアからベーリング海峡を渡った後に北米本土の氷河を避けて西海岸に沿って南下した同一の祖語にさかのぼると考えられるので、借用ではなく遠い祖先から受け継いできた共通の音声パターンに由来するであろう。

では、(25) の2にあげられた「オランダ語やフラマン語を、例えばドイツ語北部やスカンジナビアの諸方言から対比的に区別する、一般的な音声上の特色がいくつかある。こういう特質のひとつに、帯気しない無声閉鎖音 (p, t, k) の存在がある」場合はどうか。(26) に続く次の引用がこの問いに答えている。

(29) 実は、現在のわれわれには証明しえないような系譜関係に起因する古い類似性であ

る可能性がある。(p.346)

つまり、

(30) もしかりに帯気しない閉鎖音の方が古い音であり、古いゲルマン語の子音の変化されないままの結果音だと仮定すると、フランス語に隣接するオランダ語の諸方言が、ゲルマン語に一般的であったと思われる音声的駆流を守って、これらの子音を【フラン語風に】変化させなかったのは、重要な歴史的事実ではないだろうか。(p.344)

この文章の意味は次のようである。

オランダ語やフラマン語には、同じゲルマン語でありながらドイツ語北部やスカンジナビアの諸方言とは違った音声上の特色がいくつかある。例えば、帯気しない無声閉鎖音 (p, t, k) である。これらの音は、オランダ語やフラマン語に隣接するフランス語の帯気する音を思わせるような明確な金属的な音質を持っていて、ゲルマン系の英語、北部ドイツ語、デンマーク語の、もっと強い、帯気閉鎖音とは対立する。これらの無声閉鎖音はフランス語からの借用ではないかと思わせる。しかし、もしも帯気しない閉鎖音の方がゲルマン祖語以来の古い音であり、古いゲルマン語の子音の変化しないまま残された発音の結果音だと仮定すると、フランス語に隣接するオランダ語の諸方言が、古い時代のゲルマン語に一般的であったと思われる音声的駆流に従って、これらの子音をフランス語風に変化させなかったとすれば、隣接するフランス語の影響よりもゲルマン語以来の駆流を優先させたことになる。もしこのことが間違っていないければ、言語の歴史におけるパタンと駆流の強力さを確認し、借用を否定することになる。

そして、サビアは、346頁から348頁にわたり、高地ドイツ語の方言の鼻母音やロシア語の「*й*」に類する借用が世界中にいくつも見出すことができる、とする。ただし、この種の現象は、あくまでも受け入れる側の言語のパタンに適合していることが必要であって、パタンと駆流の存在を無視しては語れないと次のように述べる。

(31) ある言語の音声上の関心は、【音韻体系を構成する個々の】音声そのものの保存にあるのではなく、その音声パタン【音韻体系】の保存にあるかぎり (...) 首尾よく徐々にはいり込んだ外国音を、その言語が無意識のうちに採用しない理由は、実際まったくない。

ただし、これらの新しい外国音(または、付加された古い音)が、母語の駆流に向かっていることが前提条件になる。(p.347)

(32) 非常に重要な点は、それぞれの言語に、その音声パタンには手をつけずにおこうとする強い傾向があることだ。(...) 語彙においても、音声面においても、言語間の影響 (...) を過大視しないように注意しなければならない。(pp.348-9)

結局、サビアは言語史における言語接触が言語のパタンに与える影響を認めていないといっ

てもいい。それぞれの言語には祖語から受け継いだ音声と形態のパターンが厳然として存在し、体系としての言語の核心を形成するパターンはかたくなに外国語からの借用を拒否する。そのような視点から、サピアは隣接する言語からの影響、借用にはきわめて否定的である。以下に第9章におけるサピアの、言語の相互影響の否定的見解の核心をなす部分をあらためて引用する。

(33) 外国語の単語の借用は、つねに、それらの語の音声の手直しを伴う。その場合、自国語の発音習慣にできるだけ違反しないように変えられる。外来音の歩み寄りが行われる場合もままある。例えば、英語に導入されたフランス語の *camouflage* は英語の発音ともフランス語の発音とも異なる妥協した発音である。一見、フランス語の発音に思える部分も英語の古い音の用法を拡大したにすぎない。時として新しい音が輸入されることもあるが、多分、それは間もなく消失するであろう。このような事実は、言語がその音声パターンへの根本的な干渉にどれほど頑強に抵抗するものであるかを示している。
(pp.341-2)

(34) ある言語の音声上の関心は、音声そのものの保存ではなく、その音声パターンの保存である限り、(...) 新しい音の採用は、母語の駆流の方向に向かっていていることが前提条件になる。(p.347)

(35) 非常に重要な点は、それぞれの言語に、その音声パターンには手をつけずにおこうとする強い傾向があることだ。語彙においても、音声面においても、言語間の影響 (...) を過大視しないように注意しなければならない。(pp.348-9)

サピアからの以上の引用を読むと、言語は祖語から受け継いだパターンに忠実に従って歴史を刻み続けるのみである（駆流）。ある言語の音韻のパターンと形態法のパターンに外国語が与える影響はほとんどあり得ないことになる。もし何らかの影響があってもそれはその言語が祖語から受け継いできたパターンに適合できる場合のみである。あるいは、きわめて表層的な付加にすぎないのである。

古期英語期における [v, z, d_ʒ] が位置異音から音素への変化と、*sky, skill, skin* に見られる古期ノルド語の [sk-] 音の借用は、英語がもともと持っていたが、古期英語期にはたまたま活用していなかった音韻のパターンの「偶然のあきま (accidental gap)」を古期ノルド語からの借用により補てんしたにすぎないのである。英語が言語として独立する以前のゲルマン祖語の時代には、[sk-] 音は存在したのであるが、英語が古ノルド語、ドイツ語などと同様にゲルマン語から分離独立した後に音声変化 ([sk- > -] *ship, shirt*) でたまたま活用していなかっただけのことである。また、フランス語の二重母音（つづり字 *oi, oy* で表記される音）の借用も「偶然のあきま」の復活であるうえに、英語は元来二重母音を好む傾向にある。従っていずれも英語の音声パターンに適合した変化であり、英語の音声パターンには何らの変更も認められない。

そして、サピアは結論づけていう。

(36) 言語は、おそらく、あらゆる社会現象のうちで最も自足的で、最も大きな抵抗力のあるものである。言語に固有のパタンを破壊するよりは、いっそ言語自体を絶滅させるほうが容易なのだ。(pp.356-7)

結局、言語にとって根幹をなすのは祖語の時代から連綿として受け継がれてきたパタン(音声構造の型、形態構造の型)である。外国語からの影響はパタンに適合する要素だけが受容される。従って、いかなる言語にとっても外国語の影響が原因とみられる変化はごく表層にとどまる。パタンのみが言語変化の第一原理であり、借用はパタンに適合する要素のみが受容されるという意味で表層的であり第二義的であるにすぎない。サピアからの引用文(37)は本稿で述べてきたすべてのことが集約されている。

(37) The study of how a language reacts to the presence of foreign words rejecting them, translating them, or freely accepting them may throw much valuable light on its innate formal tendencies. (Sapir, *Language*, 1921, p.341)

(ある言語が外来語に直面した際にどのような反応を示すのか それに反発するのか、修整して採用するのか、それとも自由に受け入れるのか についての研究は、その言語に内在する形態上の傾向に、非常に貴重な光明を投ずる場合がある【外来語が借用ののち受けた変化から、単なる単語レベルの現象だけではなく、受容する側の言語の形態のパタンの傾向がわかる】。(p.341)

サピアはこのような見解を述べて、第8章で音声の変化から形態の問題へと考察を進めている。借用に関しても第9章の349頁6行目から、第8章と同じように音声論から形態論へと考察を進めている。音と形態との深い相関関係も見逃してはならない点である。

§ 5. 形態の借用もまずありえない

言語の相互影響を述べた第9章は、章の前半では音声の借用を論じている(pp.333-49)が、349ページの半ばからは形態の借用へと論が推移している。

音声への外国語からの影響にサピアは否定的であったが、形態への影響についてもサピアはきわめて否定的である。

(38) 英語は、フランス語から形態的要素をいくつか引き継いでいる。英語は、また、ラテン語やギリシャ語に由来する接辞をいくつか利用している。(…) materialize (具体化する)の -ize や、breakable (こわれやすい)の -able のように、今日も生産的でさえある。【しかし】このような例は、ひとつの言語が形態上の影響を別の言語に及ぼした真の証拠には到底ならない。(…) 英語の構造上の特異点には何ひとつ付け加えていないからである。(…) 単に、wide (広い)、widen (広げる)のような例でおなじみの形態法の種類の数を増やしたにすぎない。(…) ほとんど英語の本質的な構造に相違を生じさせなかった。

(...) 英語がフランス語の総合的な未来形【*aimerai-je* (単純未来), *aurai-je aimé* (前未来)】,あるいはラテン語の重複法 (*tango, tetigo* (私が触れる 私が触れた), ギリシャ語の *leipo, leipoipa* (私が残す 私が残した))といった重複法をモデルにして【*I will, We shall*, といった現在形の助動詞による代用形ではないまったく】新しい未来形を機能的な手段として発達させたのであれば, 当然, 真の形態法上の影響があったといってもよい。しかし, そのような広範な論証はできない。

英語史全体を見わたしてみても, 重要な形態法上の変化で英語本来語の駆流によって決定されなかったものは, ほとんど一件も指摘しえない。(pp.349-50)

サピアは第9章のいたるところで, 外国語からの形態への影響について否定的な意見を繰り返して述べている。

(39) 英語が, 連綿と自己充足的な形態法上の発達をとげてきたことと, 英語の根本的な構造が, 外部からの影響を受けた程度が非常にわずかであったことを, とくと理解することが重要である。(…) 外部の異国語からの影響がなくても, 広範な分析的な発達が起こりうることは, デンマーク語の歴史に照らして明らかである。というのも, デンマーク語では, いくつかの水平化の傾向が英語よりもなお一段と進んでいるからだ。

(…) 驚くべきことは, 外部からの形態法上の特色をいくつか取り入れて, 英語の具体的な目録を単に増大させたという点ではなく, むしろ, パタンを作り直すほどの影響にさらされながらも, 自己本位のパタンと歴史的な駆流に, あれほど忠実であり続けた点である。(p.351)

(40) 真に深刻な形態法上の影響は, (...) 組み込まれる機会がほとんどなかったこと。
(…) あるいは, 最後に, ある言語は, パタンを作り直すような形態法上の影響を他の言語に容易に及ぼすことができる, と想定する資格がわれわれにはないこと。(p.352)

同じく形態法の借用に関する否定的な主張であるが, 借用ではなく実は遠い祖語から受け継いできたパタンの痕跡である場合があるという独自の見解が加えられているのが次の引用(41)である。

(41) 狭い地域内の異なる言語間に類似した例が多くみられる場合は, 【借用ではなく】分岐的駆流の破壊作用のために今日では認識できなくなった, 共通したパタンや音的実質の最後の痕跡に他ならない, ということにはならないだろうか。

近代英語とアイルランド語とのあいだには (...) 両者の【同じ印欧語族に属するという】系譜関係をかなり決定的に立証するに足りるほどの語彙と形態法の類似点があるが, 今もなお存在するように思われる。【このような】形態法上の類似の比較的重要な分布の多くは, まさに【印欧祖語から連綿として受け継いできた】痕跡として説明すべきである。(…) 言語複合体の究極の奥底に隠されている構造上の根本的な特徴を説明するには

「借用」説はだけではまったく不十分である(「第9章」, pp.353-5)。

たがいによく似た現象を安易に近隣の言語からの借用と決めつけるのではなく変化の実態をよく観察すれば祖語の時代から受け継いできたパタンである場合があることに気づくべきだという指摘は重く受けとめるべきだろう。

さらに、サビアはもうひとつ重要な見解を述べている。音声の借用と形態法の借用を並置して述べている次の引用(42)である。

(42) いくつかの言語は、十中八九、隣接する言語からの暗示的な影響を受けて、構造的な特徴を獲得したに違いない、と認めてもよい。

けれども、そのような例を検討してみると、それらは、受容する側の言語の形態的革新に皮相的に付加されたものにすぎない(...)。従って、われわれとしては、言語形式音声パタンと形態のパタンにおける主要な一致と相違とを(...)言語の自律的な駆流に帰することにしよう。

言語は、おそらく、あらゆる社会現象のうちで最も自足的で、最も大きな抵抗力を持つものである。その言語に固有のパタンを破壊させるよりは、いっそ言語自体を絶滅させる方が容易なのだ。(pp.356-7)

この引用(42)では、第9章の前半で論じた音声パタンの借用はまずありえないという主張に加えて、後半では形態のパタンへの借用もまずありえないというふたつの主張の結論がまとめられていることには意味がある。しかも、えてしてあいまいな表現である「言語形式」が「音声パタンと形態法【形態のパタン】」を意味することが明記されていることには、サビア理解のためには、特に注意が必要である。

第7章と第8章の前半までは、音声のパタンと駆流とを論じているが、第8章の後半は、元来は音声の現象であるウムラウトを題材として「音声のパタン」の問題をたくみに「形態のパタン」へと論を推移させている。第9章も、借用を題材として、前半を音声のパタンを論じ、後半は形態のパタンへと論を推移させている。音韻が中心の第7章と第8章、それに借用を論じた第9章はそれぞれ前半は音声を扱い後半は形態を扱って、比較して考察できる構成になっている。実は、音声の体系と形態の体系(パタン)が言語の根本的な土台をなしていることが『言語』「第1章 序論 言語の定義」にあらかじめ明言されている。

(43) 言語の根本的な土台 明快な音声体系【音声のパタン】の発達、(...), あらゆる種類の関係を形態のパタンに従って表現するための精緻な用意【形態のパタン】 これらはすべて、既知のどの言語を見ても、厳密に完成され、体系化されているのである。(p.43.)

従って、言語の歴史的特徴を述べた第7章、第8章、第9章という三つの章を通して、あらゆる言語の根幹をなす音声の体系を前半に、後半に形態の体系の歴史的観察法を論じているので

ある。そこで述べられているサピアの意図は、従来の比較言語学の方法全体への見直しを要請する提言なのである。このことは次の引用（44）からうかがい知ることができる。

(44) どの言語学者でも、音変化がしばしば形態の体系の配列換えを伴うことを知っているが、形態法の方は、音の歴史にほとんど影響を及ぼさない、と推定しがちである。私は、どちらかと言えば、音声学と文法【形態論】を相互に無関係な言語の分野であるとして分離させる現代の傾向は不幸である、と考えている。両者の間には、また、それぞれの歴史の間には、まだ我々の十分に把握していないような根本的な相互関係が存在する公算は大きいのである。(p.319.)

ここに述べられていることは、形態にも音韻と同じように厳然たるパターンが存在するということである。さらに重要なことは、「どの言語学者でも、音変化が【機械的に作用して】しばしば形態の体系の配列換え【しばしば混乱】を伴うことを知っているが、形態の方は、音の歴史にほとんど影響を及ぼさない、と推定しがちである。私は、どちらかと言えば、音声学と文法を相互に無関係な言語の分野であるとして分離させて考察する現代の傾向は不幸である、と考えている」とサピアが述べていることである。

またこのことは、形態法の一部である「類推」に新しい役割を持たせることになる。サピアの意図を明らかにするために、第7章と第8章の後半部分を取り上げて、形態のパターンが音声のパターンにどれほど密接に関与するかを指摘しておかなければならない。